

◎ 金城光夫

(琉球スピリット作家)

わたしは王

自己中こそが宇宙ののぞみ

まだ世界の誰もつかんでいない秘密
5次元の耳でしか聞けない話

はじめに

もしも、病気をカンタンに治せるとしたら

もしも、すべての望みを叶^{かな}えられるとしたら

もしも、何百年でも生きられるとしたら

もしも、永遠の若さを手に入れられるとしたら

もしも、自分の中の天才を目覚めさせられるとしたら

もしも、理想の家庭を築くことができるとしたら

もしも……。

地球は、5次元に上昇しました。

いま、書いたことがすべて、可能な世界になったのです。

あなたの夢は、なんですか？

あなたの願いは、なんですか？

あなたは、何者になりたいですか？

そして、幸せになりたいですか？

5次元とは「想い」の世界です。

あなたの「想い」がすべて、形になる世界です。

「想い」は光の速さで、

(何万年もかかる)宇宙のはてまでも、一瞬で届きます。

「想ったこと」は、必ず実現するのです。

5次元とは、決して特別な世界ではなく「想い」が通じる世界です。

そこは、生きたままで行ける、天国なのです。

それが、次元上昇した地球なのです。

それが本当なら、とても素晴らしいことだと思いませんか？

「でも、実感が湧かないんですけど……」と、思うかもしれません。

それは、3次元の思い込みや固定観念を引きずっているからです。

では、どうやったら、

5次元の世界に入れるのか？

疑問ですよね。

でも、5次元に入るために何かする必要はないのです。

なぜなら……「もう、5次元だから」。

「えっ、もう5次元？意味がわかりません」と思いましたか？

でも、「意味がわかったら」5次元に入れるわけではありません。

「5次元に入ったら」意味がわかってくるのです。

「えっ、どうやって……？」という疑問自体が、3次元を引きずっています。

5次元に「入ろうとしなくて」いいのです。

5次元だと「知るだけで」いいのです。

何もしなければ、すでに5次元なのです。

無条件で誰もが、5次元にいるのです。

意味がわからなくても、喜んでいればいいのです。

無条件で喜ぶこと、これこそが5次元なのです。

そして無条件で喜ぶと、

(自分が)喜べる条件を、引き寄せるのです。

すこし前、『引き寄せの法則』や『ザ・シークレット』という本が流行りました。

これらの本では、

誰もが法則を使って素晴らしいことを引き寄せられる……と説かれています。

が、

本を読んだすべての人が、幸せになったのでしょうか？

本を読んで、夢を叶えられたのでしょうか？

そうではない人もいるのではないかと、僕は思っています。
なぜなら、一番大切なことを知らない人が多いからです。

法則ばかりに注目して、

肝心の本人が「自己不在」になってしまっているのです。

何よりも大事なこと || 「自分」です。

自分を、何者だと思っているのか？

これがわからないまま法則を使っても、使いこなせるはずはないのです。
望みを叶えるのは「法則」ではなく「自分」なのですから……。。

そこで、この本では、

「どんな法則でも使いこなせる自分」

になる方法を、伝授していこうと思います。

「わたしは王」

すべての答えは、この言葉に集約されています。

この本を読み終えるころには、その理由もわかってくるでしょう。そして、5次元の世界を謳歌おうえかできるようになっていくはずですよ。

あなたの幸運を、祈ります。



わたしは王◎目次

はじめに 1

わたしは王 11

王の自覚 21

封印された王 32

王の方程式 40



王の眼差し	135
王の道	123
王の一念	106
王の姿勢	95
王の投影	83
王の想い	68
王の在り方	56



押し寄せの法則

147

弥勒^{みるく}世果^{ゆが}報^{ほう}

160

あとがき

175

わたしは王



「わたしは王」

と聞いて、どんな印象を受けるでしょうか？

八〇%くらいの人は「偉えらそうに」とか「自惚うぬぼれて」と思うかもしれません。

そして、

一九%の人は「他人の目を気にしないで生きる」ことの、
比喩ひゆだと思っっているかもしれません。

しかし、どちらも違います。

まず、「王」という言葉に対するイメージを、見直してほしいのです。

「王」とは、どんな人だと思いますか？

ひよっとしたら「権力者」、

あるいは「独裁主義者」だと思ひ込んでいる人が多いかもしれません。

また、「王」は（家来に）命令を下しますが、

「人は平等なのだから、王様だって謙虚に、対等であるべきだ」

と、考える人がいるかもしれません。

しかし、仮に「王」が、

「○○殿、どうかこれをやってくれまいか？」

と、ていねいにお願ひしたとして、上手くいくのでしょうか。

僕は一国の「王」になつたことがないので、どうなるかはわかりません。

それよりも、なぜ「王」は命令口調なのでしょう。

それは、単純に「仕組みだから」なのです。

「王」が命令を下し、家来が忠実に事を成す。

命令を下すために判断をするのが「王」の任務であり、命令に従うのが、家来の仕事なのです。

そして「命令」とは、決して偉そうな行為のことではなく、パソコンのEnterキーを押すのと一緒で、そこに感情は伴いません。

命令を下す前に……パソコンのEnterキーを押す前に、判断をする人物こそ「王」なのです。

「王」は自分の任務を忠実にやっているだけですから、「偉そうに！」と言われても困惑します。

「いや、Enterキーを押したからです……」と。

そうです、

問いかけるべきは「命令を下す」行為そのものではなく、

「王」の判断能力なのです。

何を基準に判断して、何をさせるために命令しているのか？

私腹のための判断なのか、

民や世の中、ひいては平和のための判断なのか？

ともあれ、

命令されれば、家来は動きます。

Enterキーを押してしまえば、コンピューターは自動で動きはじめるのです。

さあ、いよいよ本題に入っていきます。

「わたしは王」とは、一体何を伝えたいのでしょうか？

もちろん、「わたし」が「誰よりも偉い」と言いたいわけではありません。

「自分の人生だから、好きなように生きればいい」という浅い話でもありません。

残り1%の人の、話がしたいのです。

イエス・キリストも「わたしは王」であると言いました。すると、「国への反逆だ！」と誤解した人々から、彼は追われる身となってしまったのです。

イエスは、一国の「王」の座などに興味はありません。

彼の使命は、世界中の人々を目覚めさせることだったのですから……。が、世の中の人々は、自分の価値観でしか、言葉の意味あいを捉えられなかったのです。

人は、自分が信じた世界に住んでいます。

したがって、話をする前にまず、

聞くための心構えをおしえることが大切です。

そうしないと何を話しても、

その人の「フィルターがかかった」状態で、聞いてしまうからです。いったん、色眼鏡を外してもらおうことが必要なのです。

そのための具体的な方法は、次のとおりです。

- 一、「わたしは王」とは、どういう意味か？
- 二、「わたしは王」とは、何を伝えようとしているのか？

この二つを、

まずは自分の解釈を入れないで考えて、
さいごまで話を聞いて欲しいのです。

「わたしは王」とは、何を指しているのでしょうか。
もちろん、

「わたしは偉い」という意味ではありません。

あなたには、自分の立場を
しっかりと自覚してほしいのです。

自分という人間の「王」は、自分なのです。

日常生活、たとえ仕事上は使われる身分だったとしても、

自分の「体」「心」「頭」を使うのは、
ほかの誰でもない「自分」なのです。

これは、否定しようがない事実です。

しかし、大半の人は、

自分の体に使われ、頭に使われ、心に使われてしまっています。

お腹が空いたらお腹に振りまわされ、

考えすぎでは不眠症になり、

感情をコントロールできなくなったりするのは、

自分が「王」の座を明け渡しているからに違いありません。

自分が「王」で、すべてを統治していたら、そのようなことは起こらないのです。

「体」「頭」「心」、すべて自分しだいでコントロールできます。

「わたしは王」という自覚が生まれるとき、自分の病気はカンタンに治せます。

自分が「王」なのだから、身体に命令すればよいのです。

また、「王」という自覚があれば、肥満はあり得ません。

自分が「王」なら、お腹は家来なので、命令すればいいだけです。ふくよかな体系の人は、お腹の家来に成り下がっていることが多いのです。

「お腹が空いたから、食べものを運べ」

とお腹に命令されて、忠実に従っているのです。

お腹は調子にのって「もつともつ」と、要求します。

お腹が「王」になると、とてもたちが悪いのです。

お腹が空いて不機嫌になる人は、

(本人ではなく)、

お腹という主人の代弁者として、その人が怒ってみせているだけなのです。

本来は自分が「王」なのに、

忠実な家来になってしまっている人がとても多いのです。

お腹が空いたらお腹の家来に、

考えごとが増えたら頭の家来に、
歯が痛くなったら歯の痛みに、

性的に欲求不満になったら性欲に……と、
つねに「自分ではない」ものに振りまわされてしまっています。

あなたは「たくさんの王」に仕えては家来として働き、
気がついたらお迎えが来て、

誘われるままに天国へ……召されてしまうかもしれません。

王として生まれ、

家来として生き、

羊となって天国へ。

これは、僕なりに警鐘をこめた皮肉です。

そして僕は、声を大にして叫びます。

「わたしは王」と。

そして、あなた方も「王」であるべきなのです。

家来でいる限り、自分の人生は変えられません。

なぜなら、家来は自分しいではなく「王」しいですから……。

どんなに「人生は自分しい」と学んでも、

家来のままでは、そうなりません。

自分しいの人生を送りたいのなら、

まずは自分が、自分の国の「王」になるべきです。

自分が「王」なら、

身体も病気も運氣さえも、命令一つで変えられます。

そして、自分の住みよい王国を築くことができます。

これが、イエスの提唱していた「王国」なのです。

「王国」＝「自分の世界」のことなのです。

人は、自分の世界の王国を統治してはじめて、一人前となります。

世間的な言いかたをすれば、「自己管理」にあたります。

自分が「王」になってこそ、自己を管理することができます。

王の自覚



「わたしは王」とは

「自分の人生はすべて、自分で創っている」という意味あいです。

つまり「王」とは、

「自分が主人」という意味であり、

「自己」のことなのです。

自分のことを「王」と思えないのなら、自己不在です。

自分の想いは無視して、

時間しだい、

お金しだい、

恋人しだい、

子供しだい……で、
生活していませんか？

相手のことを想ってやっているのかもしれないが、
自己不在の人がそれをやってしまうと、自己の中の調和が乱れます。
そして、その先の発展がなくなってしまうです。

偽善は、長く続きません。
もっと、自分の想いを大切にしても、良いのではないのでしょうか。

が、小さいころから「自己中はよくない」とおしこまれてきたので、
つい、自己をどこかに追いやって、不在にしてしまうのです。

では、なぜ、

「自己中はよくない」のでしょうか？

それは、間違った解釈に起因するようには思います。

「自分は我慢しているのに、なぜ……あの人は我慢しないの？」

と、思ったりすることはないでしょうか？

まるで、相手のせいので、自分が不幸にでもなったかのように……。

それなら「自分も我慢しなければいいのに」と、僕は思います。

自分が我慢しているから、他人にも我慢させたいだけなのです。

そんな考えこそ、傲慢ごうまんではないかと感じます。

話がそれましたが、

僕は、最強の「自己中」です。

いつも、自己が中心だから……。

が、「自分さえよければ他人はどうでもいい」とは思っていません。

「自己中」というのは、

「自分を幸せにすることが好きで、自分に夢中になっている」

ただ、それだけの状態なのです。

そして、

その延長で（自分と同じように）他人を幸せにすることが、好きなのです。

自分が幸せじゃないのに、

他人を幸せにしようとするのは、

自分が食べたことがないものを

「美味しいよ」と、すすめるようなものです。

食べてもいないのになぜ、

「美味しい」と、わかるのでしょうか？

自分が幸せじゃないのになぜ、

それが幸せになることだとわかるのでしょうか？

まずは、自分が試すのが道理だと思います。

「自己中」Ⅱ「自分さえよければ、他人はどうでもいい」と解釈しているならば、

それは「自己中」じゃなくて「他己中^{たごちゅう}」です。

「自己中」とは「己^{おのれ}は自分の中にある」という意味あいです。

つまり、すべては「自己責任で動いている」ということなのです。

いっぽう、自己責任がない人は「己」が他人の中にあるのです。

旦那さん下さい、

奥さん下さい、

親下さい……。

それを

「相手のため」と本気で思っていないませんか？

だから、なにかの拍子に相手が怒ると、

「お前がよけいなことを言うから」とか、

「あなたがそうしなさいって言ったんでしょ」

と、責任のなすりあいをはじめます。

それは、自己責任から回避するため

他人を利用していただけであり、

それこそが「他己中」なのです。

つまり、人が嫌っている（世間一般でいわれている）

「自己中」≡「他己中」のことであり、
僕が言っている自己中とは、意味が異なります。

「わたしは王」とは、

「自分は、自分の名のもとに責任を持っています」と、
宣言することなのです。

病気になったり、

ケガをしたり、

会社が倒産したり、

離婚したり……。

世の中で「悪い」とされる出来ごとを引き寄せるのは、
すべて自分の責任なのです。

「悪い出来ごとは、すべて自分の責任」というと、

なかなか受け入れにくいものがありますよね。

なぜなら「すべて自分が悪い」という罪悪感につながるからです。

そして、罪悪感から逃れるために、

「たしかに自分にも非があるけれど、相手にも問題があるんじゃない？」

と、自分を正当化しはじめます。

が、ここは裁判所ではないので、誰が悪いのかを裁きたいわけではありません。

「人間の能力のしくみについて」お話ししていきたいのです。

まず、

「自分が悪いことをしたからバチが当たった」という、くだらない（！）

3次元的な発想は捨ててください。

いままで誰も教えることのなかった、

人間の能力のひみつを、解き放ちたいのです。

もし、自分が「王」だとしたら、

あなたは何を望みますか？

「病気になりたかった！」と言う人はいませんよね、

誰もが健康で豊かに、

幸せに暮らしたい……そう願っているはずですよ。

自分が「王」ならば、そのように望めば叶えられます。
そのように命令するだけでいいのです。

「そんなにカンタンにいったら、苦労しませんよ……」

そう思いますか？

が、「王」は苦労しません。

もし、苦労しているならば、

あなたは「王」ではなくて「召使い」に成り下がっているのです。

お腹の召使い。

頭の召使い。

性欲の召使い。

これが、3大召使いです。

お腹の召使いになると、どんどんふつくらとした体形になっていきます。「お腹が空いたら逆らえない」と思っていますから……。

性欲が抑えられないのは、

性欲が主人になってしまっているからです。

性欲は、うまく使えば楽しく、

三位一体を経験できる、神秘的なものです。

しかし、性欲に「使われてしまう」と自分を失い、

最低の犯罪まで犯しかねません。

これは、自制する力が弱いからではなく、

主導権を明け渡しているのが問題なのです。

頭の召使いになると、夜も眠れなくなつて、不眠症や鬱うつを引き起こします。

頭は最高のコンピューターであり、

(やはり) うまく使えば、

パソコンよりも精密な能力を發揮します。

それらを使いこなすのが「王」であり、

「王」が望めば本来、どんなことでも叶えられるのです。

しかし、召使いが望んでも、夢は叶えられません。すべての望みが叶えられるのは唯一、自分が「王」になったときだけなのです。

これが、誰も知らなかった秘密です。

夢を叶えられるのは、

「引き寄せの法則」を使えるようになったときではなく、

自分が「王」になったとき……つまり、

「主体が自分にあるとき」だけなのです。

夢を叶えるためにトレジャーマップを作ったり、

イメージを膨らませてワクワクしたり……。

そういったことの前に

肝心なのは、

自分が「王」になることなのです。

自分が「王」なら、

「どうすれば夢は叶うのか」とは考えませんよね。

叶わないものはないのだから、

考えるのは「いまどうしたいのか」、それだけです。

そして、自分の夢が「まちがいなく叶う」とわかったら、

自然と、他人のことも考えられるようになります。

自国の豊かさや安全が保障されれば、

他国に親切にする余裕も生まれるのです。

対して、召使いは他国のことまで考える余裕はありません。

つまり、自分が「王」になることが、

他人の幸せにも影響をおよぼすのです。

『引き寄せの法則』や『ザ・シークレット』を使いこなせずにいる人は、
自分を「王」ではなく「召使い」にしてしまっています。

それゆえ「わたしは王」という自覚は、魔法なのです。